

## 資料

### ① 国連海洋法条約第 286 条

……この条約の解釈又は適用に関する紛争であつて第 1 節に定める方法(=交渉など)によつて解決が得られなかつたものは、いずれかの紛争当事者の要請により、この節の規定に基づいて管轄権を有する裁判所に付託される。

### ② 国連海洋法条約第 287 条 (手続の選択)

1 いずれの国も、この条約に署名し、これを批准し若しくはこれに加入する時に又はその後いつでも、書面による宣言を行うことにより、この条約の解釈又は適用に関する紛争の解決のための次の手段のうち一又は二以上の手段を自由に選択することができる。

- (a) 附属書 VI によつて設立される国際海洋法裁判所
- (b) 国際司法裁判所
- (c) 附属書 VII によつて組織される仲裁裁判所
- (d) 附属書 VIII に規定する一又は二以上の種類の紛争のために同附属書によつて組織される特別仲裁裁判所

2 (略)

3 締約国は、その時において効力を有する宣言の対象とならない紛争の当事者である場合には、附属書 VII に定める仲裁手続を受け入れているものとみなされる。

4 紛争当事者が紛争の解決のために同一の手続を受け入れている場合には、当該紛争については、紛争当事者が別段の合意をしない限り、当該手続にのみ付することができる。

5 紛争当事者が紛争の解決のために同一の手続を受け入れていない場合には、当該紛争については、紛争当事者が別段の合意をしない限り、附属書 VII に従つて仲裁にのみ付することができる。

③ 国連海洋法条約第 298 条に基づく中国の宣言

The Government of the People's Republic of China does not accept any of the procedures provided for in Section 2 of Part XV of the Convention with respect to all the categories of disputes referred to in paragraph 1 (a) (b) and (c) of Article 298 of the Convention.

④ 国連海洋法条約第 298 条 1 項（第 2 節の規定の適用からの選択的除外）

第 1 節の規定に従って生ずる義務に影響を及ぼすことなく、いずれの国も、この条約に署名し、これを批准し若しくはこれに加入する時に又はその後いつでも、次の種類の紛争のうち一又は二以上の紛争について、第 2 節に定める手続のうち一又は二以上の手続を受け入れないことを書面によって宣言することができる。

(a)(i) 海洋の境界画定に関する第 15 条、第 74 条及び第 83 条の規定の解釈若しくは適用に関する紛争又は歴史的湾若しくは歴史的権原に関する紛争。……

⑤ 国連海洋法条約第 281 条 1 項（紛争当事者によって解決が得られない場合の手続）

この条約の解釈又は適用に関する紛争の当事者である締約国が、当該締約国が選択する平和的手段によって紛争の解決を求めることについて合意した場合には、この部に定める手続は、当該平和的手段によって解決が得られず、かつ、当該紛争の当事者間の合意が他の手続の可能性を排除していないときに限り適用される。

⑥ 国連海洋法条約第 283 条 1 項（意見を交換する義務）

この条約の解釈又は適用に関して締約国間に紛争が生ずる場合には、紛争当事者は、交渉その他の平和的手段による紛争の解決について速やかに意見の交換を行う。

⑦ 国連海洋法条約第 288 条 4 項（管轄権）

裁判所が管轄権を有するか否かについて争いがある場合には、当該裁判所の裁判で決定する。

⑧ 国連海洋法条約附属書 VII 第 9 条

いずれかの紛争当事者が仲裁裁判所に出廷せず又は自己の立場を弁護しない場合には、他の紛争当事者は、仲裁裁判所に対し、手続を継続し及び仲裁判断を行うよう要請することができる。いずれかの紛争当事者が欠席し又は弁護を行わないことは、手続の進行を妨げるものではない。仲裁裁判所は、仲裁判断を行うに先立ち、仲裁裁判所が当該紛争について管轄権を有することのみならず、請求が事実及び法において十分な根拠を有することも確認しなければならない。

⑨ 国連海洋法条約第 121 条（島の制度）

- 1 島とは、自然に形成された陸地であって、水に囲まれ、高潮時においても水面上にあるものをいう。
- 2 3 に定める場合を除くほか、島の領海、接続水域、排他的経済水域及び大陸棚は、他の領土に適用されるこの条約の規定に従って決定される。
- 3 人間の居住又は独自の経済的生活を維持することのできない岩は、排他的経済水域又は大陸棚を有しない。

⑩ 国連海洋法条約第 13 条（低潮高地）

- 1 低潮高地とは、自然に形成された陸地であって、低潮時には水に囲まれ水面上にあるが、高潮時には水中に没するものをいう。低潮高地の全部又は一部が本土又は島から領海の幅を超えない距離にあるときは、その低潮線は、領海の幅を測定するための基線として用いることができる。
- 2 低潮高地は、その全部が本土又は島から領海の幅を超える距離にあるときは、それ自体の領海を有しない。

⑪ 国連海洋法条約第 2 条 3 項（領海、領海の上空並びに領海の海底及びその下の法的地位）

領海に対する主権は、この条約及び国際法の他の規則に従って行使される。

⑫ 国連海洋法条約第 298 条に基づく韓国の宣言

In accordance with paragraph 1 of Article 298 of the Convention, the Republic of Korea does not accept any of the procedures provided for in section 2 of Part XV of the Convention with respect to all the categories of disputes referred to in paragraph 1 (a), (b) and (c) of Article 298 of the Convention.

⑬ 坂元茂樹「海洋境界画定と領土紛争」『国際問題』565号（2007年10月）

「……韓国は、突如、これまでの姿勢を転換し、中間線の基点となる島を鬱陵島から竹島に変更した。……すなわち、EEZの基点を鬱陵島としていた（竹島はEEZを有しない岩礁であるとの理解と推察される）は、竹島を基点とした『竹島・鬱陵島中間線』の立場を採用したのである。これに対して、日本は従来から竹島を基点とした『竹島・鬱陵島中間線』を主張しており、このため境界画定の交渉は暗礁に乗り上げている。……韓国の方針転換は、両国が、竹島がEEZを有する島であることに合意したことを意味する。……日比谷公園ほどの広さの岩礁である竹島は、EEZを有しない島であるとの主張を勧告は放棄したように見える。」（18－19頁）

⑭ The South China Sea Arbitration, Award of 12 July 2016

620. Finally, the Tribunal does not consider that the military or other governmental personnel presently stationed on the features in the Spratly Islands by one or another of the littoral States suffice to constitute “human habitation” for the purposes of Article 121(3). These groups are heavily dependent on outside supply, and it is difficult to see how their presence on any of the South China Sea features can fairly be said to be sustained by the feature itself, rather than by a continuous lifeline of supply and communication from the mainland. Military or other governmental personnel are deployed to the Spratly Islands in an effort to support the various claims to sovereignty that have been advanced. There is no evidence that they choose to inhabit there of their own volition, nor can it be expected that any would remain if the official need for their presence were to dissipate. Even where the current human presence in the Spratly Islands includes civilians, as is the case on at least Thitu and (very recently) Itu Aba, the Tribunal considers that their presence there is motivated by official considerations and would not have occurred, but for the disputed claims to sovereignty over these features.

621. The Tribunal sees no indication that anything fairly resembling a stable human community has ever formed on the Spratly Islands. Rather, the islands have

been a temporary refuge and base of operations for fishermen and a transient residence for labourers engaged in mining and fishing. The introduction of the exclusive economic zone was not intended to grant extensive maritime entitlements to small features whose historical contribution to human settlement is as slight as that. Nor was the exclusive economic zone intended to encourage States to establish artificial populations in the hope of making expansive claims, precisely what has now occurred in the South China Sea. On the contrary, Article 121(3) was intended to prevent such developments and to forestall a provocative and counterproductive effort to manufacture entitlements.

⑮ The South China Sea Arbitration, Award of 12 July 2016

805. Based on the record before it, the Tribunal is of the view that Scarborough Shoal has been a traditional fishing ground for fishermen of many nationalities, including the Philippines, China (including from Taiwan), and Viet Nam. The stories of most of those who have fished at Scarborough Shoal in generations past have not been the subject of written records, and the Tribunal considers that traditional fishing rights constitute an area where matters of evidence should be approached with sensitivity. That certain livelihoods have not been considered of interest to official record keepers or to the writers of history does not make them less important to those who practise them. With respect to Scarborough Shoal, the Tribunal accepts that the claims of both the Philippines and China to have traditionally fished at the shoal are accurate and advanced in good faith.